

あとがき

大友一雄

2019（令和元）年末からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大によって、世界の人々は大きな不安と混乱のなかにある。研究のための調査や研究集会などの開催は感染防止の点から規制される状態が続き、本書の取りまとめの研究会もメンバーが直接参集しての開催は困難であった。オンライン・システムの活用が急速に進展し、新たなコミュニケーション・ツールとして定着した感があるが、これもここまで多くの人々との濃密な調査や研究交流があったからこそ可能になったことであり、一刻も早い日常への回復が期待される。

さて、特定の国や地域で発生した資料群がさまざまな理由で、その地を離れ他国に所在することは少なからず確認できる。マレガ資料群もその一つである。こうした資料群の保存・活用環境の整備は、双方にとって新たな学問と交流の大きな機会となる。バチカン図書館チェーザレ・パシーニ（Cesare Pasini）館長は、2019年10月大分で開催された国際シンポジウムにおいて、マレガ資料をめぐる多くの人々との交流を念頭に、文化こそが世界の人々を結ぶ架け橋となることを話されたが、本書は、その実践の一端を研究論文集としてまとめたものといえる。

ここでは、マレガ・プロジェクトの発足の経緯について、また、資料群をめぐる人々との出会いと交流について紹介させていただきたい。マレガ資料群は、2011（平成23）年、バチカン図書館において発見されたが、その情報はバチカンから日本の溝部脩神父（1935～2016）に伝えられることになった。同神父は、教皇庁立グレゴリアン大学に学び、日本のキリスト教史に関する研究者でもあった。資料の発見を伝えたのは、当時、図書館・文書館を統括したラファエ

レ・ファリーナ (Raffaele Farina) 枢機卿であり、溝部神父とは学友で親しい交流関係にあった。溝部神父は、これを郷里にある大分県立先哲史料館に伝え、2012年2月には同神父と先哲史料館が現地で資料を確認することになった。その後、海外調査のための体制作りは、先哲史料館長平井義人氏の諸機関への働きかけや京都府立総合資料館長井口和起氏の呼びかけ、バチカン図書館とも交流があった京都外国語大学シルヴィオ・ヴィータ (Silvio Vita) 氏などの尽力によって、2012年秋頃から本格化し、東京大学史料編纂所松井洋子氏、国立歴史民俗博物館久留島浩氏、国文学研究資料館大友一雄などが参会し、調査実現に向けて可能性を追求することになった。そのなかで人間文化研究機構の在外日本関係資料調査への参加を探り、また、その実行機関を国文学研究資料館とすることが確認された。2013年2月にはバチカン図書館パシーニ館長から国文学研究資料館長今西祐一郎宛に調査協力の依頼があり、これをもとに同年3月には大友・松井氏・青木睦氏 (国文学研究資料館)、そしてシルヴィオ・ヴィータ氏の4人がバチカン図書館と調査協力に関して協議を行った。同年11月には人間文化研究機構が調査協力に関する協定を締結、また、この協定にかかわり東京大学史料編纂所、大分県教育庁 (大分県立先哲史料館) と連携し、さらに、プロジェクトの進展にともない2015年にサレジオ大学と協定を結んだ。また、統括を担当した国文学研究資料館は、2016年にバチカン図書館、白杵市と調査研究について、2017年に別府大学と研究教育に関する協定・覚書を締結した。また、国立イタリア東方学研究所との協力・交流を深めることができた。さらに、すでに国文学研究資料館と研究教育の協定が存在したローマ大学サピエンツァ、ナポリ大学オリエンターレなどとも連携し、くずし字教育のためのテキストを出版した。いずれも資料群が架け橋となったものである。なお、「マレガ・プロジェクト」の名称は、バチカン図書館との協定書に記されたものであり、日本側とバチカンとの共同プロジェクトの呼称である。

さて、プロジェクトは上記の諸機関、および多くの内外研究者によって構成されることになったが、あわせて研究者がそれぞれの関心から連携する共同研究を立ち上げることが広く見られた。連携した共同研究には、つぎのようなものがある。東京大学史料編纂所特定共同研究『豊後切支丹史料』及びその原

文書の史料学的研究」(代表松井洋子)(2014～15年度)および同「ヴァチカン図書館所蔵マリオ・マレガ氏蒐集史料の総合的研究」(代表同上)(2016～18年度)、科学研究費基盤研究(A)(海外学術調査)「バチカン図書館所蔵豊後切支丹資料の国際的情報資源化に関する海外学術調査研究」(代表大友一雄)(2016～20年度)、科学研究費基盤研究(B)「近世日本のキリシタンと異文化交流」(代表大橋幸泰)(2017～20年度)、同基盤研究(C)「20世紀の日本・イタリア・バチカンにおける民間所在資料や地方公文書の管理」(代表湯上良)(2017～20年度)、トヨタ財団研究助成プログラム「被災アーカイブズの新たな保存技術発信へのアプローチ」(代表青木睦)(2016～17年度)、東芝国際交流財団助成「日本とバチカンの過去から未来をつなぐマレガ文書の世界」(代表大友一雄)(2017年度)、同財団助成「イタリア他、欧州の図書館所蔵の日本の古文書研究におけるネットワーキング」(代表マルコ・デル・ベーネ)(2018年度)、同財団助成「Palaeography and the Surveying Methods of Japanese Historical Documents through the Marega Collection」(代表ルカ・ミラーズィ)(2020年度)などである。プロジェクトの活動は、こうした取組みともかかわり内容を充実させることが可能になったといえる。

さまざまな組織的な連携や研究者の連携・交流のなかで調査・研究集会・展示などを実行することになったが、対応に配慮をいただいた諸団体、関係者の方々に心から感謝したい。

主な調査機関(対応担当)は次の通りである。マレガ収集資料関係では、資料群をバチカン図書館と二分するサレジオ大学図書館マレガ文庫(学長カルロ・ナンニ〈Carlo Nanni〉、マルコ・マントヴァーニ〈Mauro Mantovani〉、図書館長マルテロ・サルデーリイ〈Martello Sardelli〉)、マレガの上司でもあったヴィンチェンツォ・チマッティ(Vincenzo Cimatti)神父の資料を所蔵するサレジオ神学院チマッティ資料館(館長ガエタノ・コンプリ〈Gaetano Compri〉)、マレガが教員を勤めた星美学園短期大学図書館(副学長小島順子)において多くの知見を得ることができた³⁾。

また、キリシタン・宗門方関係の資料調査では、上記機関以外に大分市立歴史資料館・長崎歴史文化博物館・長崎純心大学博物館・京都大学総合博物館・

上智大学キリシタン文庫・熊本大学永青文庫研究センター・神戸市立博物館・九州歴史資料館などにおいて閲覧の機会を得た。

さらに、プロジェクトの遂行では、調査・研究の社会への成果発信が期待されたためシンポジウムなどを諸団体と連携して進めた。具体的な取組みについては本書巻末に示した「マレガ・プロジェクト活動記録(2) 主要公開シンポジウム・講演会・くずし字講座等」の通りであるが、このほかにも展示・テレビ番組作成などでも連携することができた。展示では大分県立先哲史料館と臼杵市教育委員会・竹田市立図書館などとの連携が充実したものとなった。具体的には先哲史料館夏季企画展「ペトロ岐部とキリシタン禁制」(2016年8月20日～9月25日)、同じく先哲史料館秋季展示「大分のキリスト教史」(2019年9月21日～11月4日)などがある。

また、諸事業の運営では、在バチカン日本国大使館(大使/山口英一・長崎輝章・中村芳夫)、国際交流基金ローマ日本文化会館(館長高須奈緒美、副館長竹下潤)、マレガ誕生地であるイタリアゴリツィア市、駐日ローマ教皇庁大使館(大使ジョセフ・チェノットゥ)から多大な協力を得た。ゴリツィア市ではマレガ誕生の地に記念プレートが設置されることにもなった。

また、バチカンでの概要調査では、連携機関・関連団体・関連研究による参加の方々から多大な協力を頂戴した(詳細は、巻末「マレガ・プロジェクト活動記録(1) 主要調査」を参照されたい)。

統括的な作業は、多く国文学研究資料館で行った。概要調査準備、概要調査データ・目録データの調整・整備、データベースの構築、シンポジウムの準備、出版物、ホームページの作成・管理、翻訳、諸情報集約などでは、つぎの若手研究者をはじめとする多くの方々の協力があった。

荒木仁朗、石田七奈子、岡朝子、小川貴至、小野清楓、小池駿介、佐々木直、清水詩織、高木まどか、高田綾子、高橋喜子、筒井弥生、野本禎司、濱島実樹、原田亜希子、日野久美子、蛭田晶子、蛭田廣一、布川寛大、淵田有香、堀越桃子、松尾悠亮、松本知佳、松本日菜子、村上瑞木、村本隼、山田素子、李美奈、和田麻子、渡辺千鶴。

また、バチカン図書館を主とする調査では、以下のイタリア在住およびイタ

リア留学生の方々に通訳・調査を助けていただいた。

清水里香、阿部愛、阿部美寿穂、松浦一之介。

さらに、困難も多い在外資料調査を円滑に進められたのは、参加いただいたメンバーとパシーニ館長をはじめとするバチカン図書館の皆さんの真摯で精力的な対応による点が大きかった。長期にわたる尽力に心から感謝申し上げる次第である。これまでの活動がバチカンと日本・大分の交流にとどまらず、世界の人々との架け橋のひとつになることを念じたい。

なお、本書刊行には、角川文化振興財団「バチカンと日本 100年プロジェクト」の協力を得たことを付記したい。

註

- 1) 溝部神父はマレガ文書の所在を長く探索しており、その記録を残されている。詳細は「イタリア紀行」1～4（別府大学図書館報『アルゴノート』13～16号、1984～1985年）。
- 2) これらの経緯はバチカンを最初に訪問された大分県立先哲史料館平井義人氏のご教示による。また、筆者自身もメンバーの井口和起、シルヴィオ・ヴィータ両氏とともに溝部神父を二度訪問する機会を得、経緯の説明と調査についてアドバイスを受けることができた。
- 3) 「あとがき」での肩書きは応対していただいた当時のものである。